

○ **はらまち九条の会** は憲法第9条を守ろうという会ですが、震災以後、憲法13条（個人の尊重・幸福追求権）、22条（居住移転職業選択の自由）、25条（最低生活の保障・国の社会保障義務）、29条（財産権の保障）など被災民の諸権利が、軽視され、蔑ろにされています。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.168

2011(平成23)年 8月 3日(水)発行

○今「相馬の民謡」が、震災で全国各地に避難している相馬人の望郷の歌になっています！

新相馬節

ハア-

遙かかなたは 相馬の空かヨ

ナンダコラヨート ハチヨーイチヨイ

相馬恋しや なつかしや

ナンダコラヨート ハチヨーイチヨイ

秋の夜寒に 針の手とめて

ナンダコラヨート ハチヨーイチヨイ

主の安否を 思いやる

ナンダコラヨート

ハチヨーイチヨイ



○「新相馬節」は第二次世界大戦後、相馬市の堀内秀之進が「相馬草刈唄」を基礎に、宮城福島両県に伝わる「石投げ甚句」を加えて編曲し、鈴木正夫の歌で全国に広まった。

戸田清教授講演会に120名出席○7月30日(土)12:30~○原町商工会議所

福島市で初開催の原水禁世界大会出席の機会に、長崎大学環境科学部教授戸田清先生を原町にお招きして、『軽視される(放射能)低線量内部被曝』についての講演会が開催されました。

口主催：はらまち九条の会・つながろう南相馬・グローバル・イン原町 <入場無料>

◆はらまち九条の会会長平田慶肇会長の挨拶 ◆若松丈太郎さんの講師紹介

演題 軽視される内部被曝・南相馬市民に知ってほしいこと

講演会の主要点 (断片的で散漫なメモですが...文責事務局)

- 3.11以降は御用学者という言葉が多用されるが、日本の大学の研究者の大半は、基本的には政府の政策を前提にしている、政府寄りである。
- 日本の原発で最も危険なのが、地震の関係で静岡の浜岡原発で特に世界一危険といわれ、老朽化では九州の玄海原発が危険といわれている。
- 今電力会社のやらせが問題になっているが、2、30年前からあったこと。
- 福島原発事故の特徴は、①震災によること、②4基同時多発、③収束の長期化の3つで、このまま収束しなければチェルノブイリ事故以上で深刻なものになると、東電自身が言っている。チェルノブイリ事故は400の村が消滅し、25年たってもまだ進行中で、30*圏内は今も立ち入り禁止です。
- 昨日長崎から東京へ、新幹線で福島に来て放射線量を測ると、東京駅0.04、郡山0.3、福島駅西口0.4、南相馬市に向かうJRバス東口乗場が0.6でした。0.6マイクロシーベルトは放射線管理区域(病院のレントゲン撮影室)で、18歳以下の子供は撮影以外では立ち入りできないところです。福島県民210万人の半数以上がこの放射線管理区域相当の中で住んでいることになり、子供も大勢いて、大変深刻な状態といわなければならない。
- 子供は大人の3~10倍敏感で、離れた他地区で生活した方がベターです。
- 今回 原発の安全神話は崩壊したが、しかし今新たに「フクシマ神話」が政府や財界で唱えられている。「フクシマ神話」とは、①地震に耐えたが津波でやられ、周辺機器がやられただけ。②直ちに健康への影響はない。③一般人の大きな被曝の「最悪」(直接の多数の死者の発生)の事態はなかった。④爆発などの「山場は過ぎた」。⑤フクシマと浜岡は例外で他は再稼働してもよい、と主張し、原発を温存し再稼働をめざすものです。
- 広島・長崎では高線量急性外部被曝が劇的だったので、低線量長期内部被曝が軽視されてきた。そのため遠距離被曝や入市被曝は原爆症に認定されにくかった。原発の被曝では低線量長期内部被曝を重視すべきだ。
- 人間は自然エネルギーを間接的に利用してきたが、原発は核エネルギーを直接利用しようとし、「消せない火」をコントロールできなくなっている。
- 欧米で原発稼働をやめた地域では、ガンなどが必ず減少している。
- 体内被曝は謎だらけで、放射能物質を排出する薬の有効性は不明です。モニタリングを密にして、除染に努めることもある程度有効です。

参考図書

- 『津波と原発』佐野真一・講談社 ¥1,500
- 『福島原発メルトダウン』廣瀬隆 朝日新書 ¥740
- 『フクシマ学』開沼博・青土社 ¥2,200
- 『東電帝国その失敗の本質』志村嘉一郎 文春新書 ¥760
- 『原発禍を生きる』佐々木孝・論創社
- 『福島原発難民』若松丈太郎・コーエールサック社 ¥1,500
- 『原発を終わらせる』石橋克彦・岩波新書 ¥840
- 『原発事故はなぜくりかえすのか』高木仁三郎 岩波新書 ¥735
- 『福島原発人災記』川村湊・現代書館
- 『原発のウソ』小出裕章・扶桑社新書
- 『これでもいいのか福島 原発事故報道』丸山重威・あけび書房
- 『内部被曝の脅威』肥田舜太郎・鎌仲ひとみ・ちくま書房 ¥720
- 『原発の闇を暴く』廣瀬隆・明石昇二郎 集英社新書
- 『低線量被曝の脅威』J.M.ケルト・緑風出版
- 『環境学と平和学』戸田清・新泉社

3. 11東日本大震災・大津波・原発事故・風評・・・私はこう思う 6

非常時における連帯は可能か

会報165号に掲載の私達の『朝日新聞』の記事では、私の怒りは伝わりません。23日の『東京新聞』、NHK「こころの時代」の徐京植氏との対話、『週刊現代』の4ページの私の記事などを読んでいただければ、私の主張がお分かりいただけると思います。

非常時における連帯は可能か、というテーマでブログに書こうと思います。事故後友人や、九条の会の会長・事務局長さんにも電話をかけました。どうですか、ということではなく、単純に安否を心配しての電話でしたが、だれもが避難していませんでした。そのときはただ淋しいという気持ちだけでしたが、時間が経つにつれていろんなことを考えさせられました。日ごろ戦争反対を唱える人たちがもっと事態が緊迫してきたときにも、果たして一緒に闘えるのだろうか、などという疑問です。

もし、お気が向いたら小生のブログを見てください。

ついでに申し上げますと、このまま九条の会に留まる意味があるのか、本気に考え始めました。

7月15日 (原町区橋本町・佐々木孝さん)

※8月14日NHK教育テレビ5時～6時放送「こころの時代・フクシマを歩いてく佐々木さんと作家徐京植氏との対談」が、8月下旬に『原発禍を生きる』として、論創社から出版されます。

原発事故で奪われた日常の営み

快適な住まいで、暗くなったら電気をつける。季節に関係ない果物や野菜が手に入り、食べたい時に食べる。しかしこれらの生活は危険を背負ったことだったとは、安全神話に慣らされた私達には信じがたいことです。

台風、洪水、竜巻、日照り、雷、諸々の自然現象に人間は太古から闘いの歴史でした。原発事故は“想定外?”ならば毎年の台風の被害は何なのでしょう! そもそも原発はエネルギーとしては危険がともなうものであり、確立されたものではないということは、政府のみなさんをご存知なかったのでしょうか?

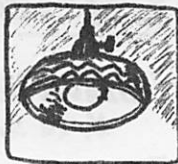
ある記事を目にしたことがあります。原発建設にゴーサインが出た次の年、事故が起きた時の被害総額が算出され、なんと国家予算の2倍の額が打ち出されたという。しかしこのデータはなぜかお蔵入りとなってしまう。2年位前に、国会図書館の資料室でようやく目にすることができたとか...

3.11の事故が起きた途端、国と東電は責任逃げばかりで、それでもなおかつ原発エネルギーを唱え、停電が起きる、工場がストップすると脅迫気味です。

それを言うならば、使用済みの核燃料をどうするのか、本気で討論し予算を投じ、開発に取り組むべきです。マスコミ、科学者、政治家、核のゴミのことを根本的に考えてくれる人は誰一人いません。

停電の時、ある人が漏らした言葉が忘れられません。「各部屋に電気がとまり、各々好きなことをしていた家族が、停電時には一つの灯りに集まり、一緒に食事をとり会話が增えた。これが本来の家族の姿なのだと思います」と。私たちは原発の恩恵でなく、基本的人権が守られる、平和な世の中で、ささやかでも生きていければいいと願っているのです。

(青森県出身・前橋市・68歳主婦Y. Kさん)



「国は、国民を守らない」

3月11日の原発事故が起きて、マスコミの報道が信じられなくなり、原発関係の本を読み、講演会に行き、映画も観に行きました。知らされなかった事、知らなかった事の多さに愕然とし、私達の生活は、私達で守るしかないし、その為には、学び合い、知らせ合い、話し合う事の大切さを思います。

瀬戸内海の祝島(上関原発)で、30年近く原発反対に身体をはって頑張ってきた人達が「国は、国は守るけれど、国民は守らない」と言っていた一言が、心に重く残っています。

今まで経済優先で、物の豊かさを追求してきた社会から、ささやかでも安心して暮らせる生活へ転換の時だと思っています。これからの子供達の為に同じことを繰り返さないことを願って、今回の体験をしっかり記憶し記録することは、とても大切なことだと思います。

(宮城県出身・前橋市・62歳主婦K. Kさん)

「私たちは、見捨てられ、切り捨てられた」

私は3月14日に原町を出て、今は山梨県南アルプス市の市営住宅にいます。

ふるさと福島は、ヒロシマ、ナガサキと並んで、カタカナで書かれるようになってしまいました。国の対応を見てみると、ああ私たちは見捨てられ、切り捨てられたのだと感じるばかりです。原発に反対と言い続けなかった自分を省みると、これから何をすべきかを考えなければ、と思います。

小さな孫がいるので、まだ帰るつもりはありませんが、原町で生活している人のことを思うと、遠く離れた地で暮らしているのは、申し訳ないような気がします。などなど、揺れ動くいろいろな気持ちでいます。

まだまだ余震が続くなか、お身体に気をつけてお過ごし下さい。(原町区・南アルプス市にて・関 零枝さん)



子どもたちが帰ってこれる原町にしよう!

私たち大人がやるべきことは、次の時代を担う子どもたちのために、安全で美しい環境や、戦争のない平和な社会を残してやることです。「はらまち九条の会」もそのためにこそ頑張りましょう。